

アスリートアンバサダー活動
インタビュー第3弾
SON 地区組織



安藤：それではこれからインタビューを始めていきます。よろしくお願いいたします。

一同：よろしくお願いいたします。

藤本 —SO 歴は何年くらい経ちましたか？

盛田さん：スペシャルオリンピックス日本・福岡は今年 25 周年を迎えたんです。なので、最初的时候からなので 25 年になります。

藤本：分かりました。次、藤原さん。

藤原：私は、SON 島根が、まだ 2014 年から設立をしたので、その前の設立準備委員会の時も含めて 9 年ぐらいですかね。（準備委員会が）2 年くらいありましたので。9 年ぐらいになるかと思います。

藤本：分かりました。はい、次、最後山ノ内さん。

山ノ内：はい、神奈川は今年で 26 年になるんですけども、私は 13 年目ですね。事務局長として。まだお子様ですね。盛田さんに比べると。

一同：（笑）

盛田：そんなことは（笑）

藤本：分かりました。ありがとうございます。





藤本 ースペシャルオリンピックスの作ったきっかけは何ですか？

山ノ内：私が作ったわけじゃないんだけどね。(SON) 神奈川ですよ？

皆さんもご存知かと思うんですけども、細川佳代子さんっていうね、全国にスペシャルオリンピックスを広められた細川佳代子さんの地元が神奈川県の藤沢市なんだよね。彼女が「じゃあ神奈川でも」っていうことで、学生時代の友達だとか、中学だとか、高校だとか、小学校だとか皆さんに声をかけて立ち上げたっていう風に聞いています。

すごいと思わない？ちっちゃいころからの友達に「やろうよ」ってみんな声かけたら、みんな「やる」っていったんだよ。すごいよね。

安藤：すごいですね。確かに、はい。

山ノ内：俺なんか声かけたって2、3人くらいしか手挙げないと思うんだけどね。そういうことです。それがきっかけだとも思います。

藤本：分かりました。次、藤原さん。

藤原：先ほど話したように、島根の組織は、2014年の4月に承認をされて未だ7年ほどしか経っていません。その前、設立準備委員会というのを立ち上げてから2年で(SON 地区組織として)認められたので、未だ9年ほどしか経っていないんですよ。私が創ったわけではなくて、話すと長くなるんですけど。

2010年の大阪のナショナルゲームのときにですね、島根県だけ選手が派遣しなくて。未だ「SON 何とか」っていう各県の組織が立ち上がっていないところもあったんですけど、それでも選手を参加させているところがほとんどで、島根だけが参加していなかったんです。開会式の時にプラカードだけが入って、歩いていたそうです。それを見て、当時愛知の委員長？会長なのか、をしていらっしゃいました坂本さんという方が、島根県出身ではないんですけど、小さいとき疎開をしておられたり、お父さんが島根県出身だったりして、島根と関わりが深い方なんですけど。島根だけが参加しなかったことに非常に残念がって、島根にも(SONを)創ってほしいということを今会長の速水(はやみ)前雲南市長さんに頼まれて、それで創ろうということになって設立準備委員会ができたということです。

その時に、私も「スペシャルオリンピックスって何よ？」って感じだったんですけど、誘われて「組織作るから手伝ってくれ」と言われて。それから準備委員会ができて、色々活動したのが認められて SON 島根というのを設立したというのがこの7年前の出来事です。まだまだ若い、島根県の組織は全国で2番目くらいに若いかな。そういうことで組織を立ち上げて今に至っています。ごめんなさい長くなって。

藤本：大丈夫です。ありがとうございます。

安藤：いえいえ、ありがとうございます。

藤本：最後、盛田さん。



盛田：私も立ち上げに直接関わったわけではなくて、
先ほどお名前がでていました細川佳代子さん。当時、熊本にいらっしゃったんですけど、
うち（SON 福岡）の立ち上げの時もリーダーであった安増 昌子会長、今の会長なんですけども、その方に「福岡でも、こういう（SO）活動があるから頑張ってみない？」というお声かけがあったそうで、そこがきっかけで福岡の組織が立ち上がったって風に聞いています。
ですから、私はたまたまその立ち上げの準備がほぼほぼ整った時期にお声があって、こういう風に関わらせてもらっているということです。

安田 ー自分と、愛史さんと里末さん、それぞれ、3人に初めて会った時の印象ってありますか？

山ノ内：愛史はね、会ったっていうよりも、最初バスケットの子たちが「愛史くんみたいになりたい」とかいう子が結構いて、そういう話を聞いて「ああ、そういう子なんだ」というのをちょっと聞いていたんです。学校連携プログラムっていうのが神奈川にあって。学校に行ってもらって、愛史くんから色々、今までの自分の流れだとか、今やっていることとか、そういうのを聞いたときの印象があります。たぶん（緊張で）上がってたと思うんだけどその時も。すごく礼儀正しくて、おとなしくて、というような感じを、印象を受けました。本当はどうか知らないけどね。（バスケの）プレーをしているときはそんなことないけどね。

安田：ありがとうございます。次は福岡の盛田さん、お願いします。

盛田：里末さんが初めて、まず参加したのは中学生のときでしたっけね？

安藤：はい。中2の後半ですね。

盛田：そうでしたよね。とてもかわいい、とてもしっかりしたお嬢さんだなという印象があります。よくお話を聞くとちゃんと答えてくれたし、おしゃべり結構好きでしたよね。みんなと楽しくおしゃべりしているなって姿をよく見ていました。その印象は今も変わらないです。

一同：（笑）

安田：そうですね、今も結構しゃべりますね、里末さん！（笑）俺もうるさい方なんですけど。じゃあ、最後。怖いけど、秀さんお願いします。

藤原：「初めてアスリートにあった時の印象」というのは良いんですか？

安田：でも良いですし、俺に初めてあった時でも。

藤原：先ほども言ったんですけども、あまり福祉（分野）のところで活動してきた経験がなくてですね。設立準備委員会を立ち上げて、プログラムが立ち上がって、最初バスケットだったかな。バスケットと水泳だったと思う。

安田：そうですね。



藤原：私ボランティア委員長を兼ねているので、お手伝いに行ったときに、

「どこのおっさんが来たんじゃ」という冷たい目に晒されて、しょうがない。耐えとったんですけども。なんていうのかな。(アスリートと) どう接していいかわからなかった。知的障害のある人達にどう接していいのかわからなかったというのが正直なところですよ。ただまあ、回を重ねてくると、いま安田君も「秀さん、秀さん」というんですけども、私、秀晶(ひであき)っていうんですよ。それで「秀さん」っていうんですけど、秀さんって言うってくれる人もだんだん増えていってですね、親しくなって色々楽しくやれるようになったのが半年経ってくらいかなと思います。

安田くんの、安田くんなんていうと腰がかゆくなるんだけど、翔飛君とはですね、もう最初のと時から会っています。彼、島根で一番最初の参加者の1人なので。生意気でもないんだけど、

安田：爆笑

藤原：今は考えられないくらい自分本位な子でした。安田君はね。ただ、今では小さい子どもの面倒もよく見るし、全体をまとめるし、アンバサダーとしてどういう仕事をしてきているのか私もよく存じ上げませんが、すごく成長したないう風に思っています。このくらいでいいでしょうか？

安田：はい、ありがとうございます。恥ずかしいのでこのくらいで(照)じゃあ次の質問をお願いします。

藤本 ー好きな四字熟語は何でしょうか？

安藤・安田：また～～(笑)

盛田：四字熟語？！

山ノ内：愛史それに凝っているよな。

安田：凝っていますね、めちゃくちゃ凝っておられますね。

安藤：前からだよ。あの、好きな言葉でもいいですよ、盛田さん。

盛田：すきな言葉。そんなのあまり意識したことないので、日ごろ意識していないので急に聞かれるとなんて答えよう。なので、すみません。一番最後にしてください。

藤本：わかりました。じゃあ、藤原さん。

藤原：はい。好きになっていうとちょっと語弊があるかもしれませんが、私の高校のキャッチフレーズになるのかな。石碑があって、質実剛健という言葉が。わかります？字が。調べてみてください。

藤本：わかりました。ありがとうございます。

藤原：しつじつごうけん(質実剛健)です。

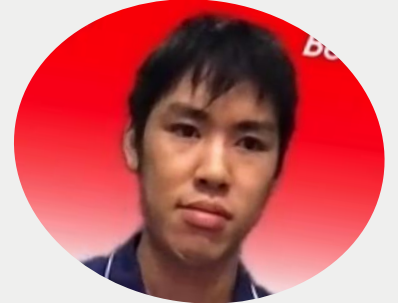


安藤：(スマートフォンで) 質実剛健。あ〜出た出た出た。「質」問に、実話の「実」ですね。

藤原：そうです。

安藤：はい、今調べました。

藤本：じゃあ次、山ノ内さん。



山ノ内：四字熟語かどうかわからないけど、漢字四文字で「大胆」かつ「繊細」。

藤本：どういうことですか？

山ノ内：大胆ってわかる？「大胆なことするな」て。「すごいお前、大胆なことするやつだな」とかって、あんまり気を遣わないでやるっていうかさ、大きなことやっちゃうっていう。でも逆に繊細っていうのはさ、すごい細かくって小さなことを細かくやるっていうことなんだけど、その両極端。大胆な時は大胆にやれ(る)、繊細なことは繊細にやれ(る)。みんなバスケットをやるじゃん？3人とも。

アンバサダー：はい。

山ノ内：そしたら、例えば「いまだったらいけ、1人で大胆に攻めろ」っていう時もあれば、「繊細な感覚で防御しろ」っていう時もない？

藤本：あります。

安藤：あ〜。ありますね。

山ノ内：そういうようなことかな。だから両極端って大事だなって思ってて。片方だけじゃなくてね。

藤原：イケイケ・ドンドンだけでなくね。ちょっと周りの様子も見ながら繊細に、細やかになっていく感じかな。

山ノ内：そうですね。ありがとうございます。

藤本：最後、盛田さん。

盛田：戻ってきましたね。忘れてくれて、スルーしてくれてもよかったんだけど(笑)、四字熟語ね。あんまり意識して生活していないので、いまだに思いつくものがないですけど、

安藤：なんでもいいと思いますよ、盛田さん。

盛田：何にしようかな。四字熟語じゃないんですけどね、「日々是好日(ひびこれこうじつ)」で私はいたいと思っていますので、はい。それにしておいてください。

安田 アスリートの数をどうやったら増やせると思いますか？

藤原：どこも各県、都道府県の組織も一番悩んでいるところだと思うんですね。特に島根なんかは人口が少ないと
 こだし、それから養護学校なんかが全面的に協力してくれればもっと増えていくのかもしれないけども、そこ
 らが望めないということである現状からすると、スペシャルオリンピックスの活動をみんなに、県民の皆さん
 にもっともっと知ってもらわなければならないのかなって感じがしています。

「知的障害の方はこういうスポーツの場がありますよ」みたいなのが伝わっていくと、少しずつでも増えていく
 のかなという風に私は今思っていますけど。ここ1年半、コロナで活動が止まってしまって、ちょっ
 とまた1からやり直しだなんていう感じがしています。

安田：はい。じゃあ次は山ノ内さんお願いします。

山ノ内：はい。これは今、藤原さんおっしゃったように、皆さんの役割でもあるけれどもとにかく認知度を上げるって
 いうことですね。それによって、やっぱり知られないと意味がないんで。

今コロナ感染がすごい勢いで流行っていますけども、スペオリ感染というものをもっと凄い勢いで、
 1日5000人とか1万人とかの勢いで、スペオリ感染を広げていかないとだめだと思っています。

安田：なかなか認知度が上がらないのが、そうですね。現状ですもんね。

安藤：現状ですよね。本当、本当。



安田：最後、じゃあ盛田さん。お願いします。

盛田：はい。やはり、前お2方がおっしゃった通り知ってもらうこと。本当に知らない方が多いんですよ。

安田：多いですね。

盛田：私たち頑張って知ってもらうようになって努力をしてきたつもりなんだけれども、やっぱり知らない人が多いの
 で、やっぱり知っていただくということが1番だと思います。それにはまず、今参加しているアスリートの皆
 さんが生き生きとスペシャルオリンピックスに参加して、生き生きと日々送ってくださっている姿を誰かが見
 ているってところで少しずつ広がっていくのかなと思います。

だから参加しているアスリートがまずは楽しいと思ってくれるように私たちも努力しなきゃいけないなって
 いう風に思いますが、今、昨年からコロナ感染（流行）ですので、もう一度なんか初心に帰ることだとか、
 今からどんどん知恵を絞ることだとか、私たちが試されているような時期でもあるかなっていう風に
 思っています。以上です。

藤本 アスリートと関わって楽しいことはなんですか？

盛田：楽しいっていうのはみんなとても、なんていうのかな。最初にアスリートにあった時の印象と同じなんです
 けども、みんなとても個性的で見ると本当に楽しいんです。最初に言いましたけども、

私の息子もアスリートとして参加してますけれども、スペシャルオリンピックスに参加しているときは、家の中では見せない姿が見られるんですね。私はたまにしか目を、顔を合わせなかったようなアスリートが何回か顔を合わせる間に、こちらをたぶん信頼というか「いつも顔みるおばちゃんだ」と思うのかもしれないけれど、「こんにちは」って挨拶してくれたり、「この間なになになって言っていましたね」とか声をかけてくれたりすることがすごく嬉しいです。それとみんな似ているところもあるんだけど、それぞれに違いがあって、それにこちらが気づけたこと。そのアスリートの良さであったり、ちょっとこういうところが苦手かもしれないけれども、こういうところでこの子は輝いているよねっていうのに気づくととても嬉しく思います。

藤本：わかりました。ありがとうございます。次、藤原さん。

藤原：はい。1人1人がプログラムを1年経験して、1年後にはそれぞれレベルの差はありますよ。レベルの差はあるんだけど、1年前の例えばAさんと、今のAさんを比べると全然違う。上達していたり、人間性も含めて。それを見させてもらう、発見できたっていうのがすごく嬉しくて。

僕もちょっと最近仕事で忙しくて、プログラム自体が止まっていることもあるんですけども、以前プログラムに出ていたときに、バスケで低学年用っていうのかな。大きな、低いリングを使って（バスケを）やってたんですよ。そしたらある女性アスリートが、1年経ったら「自分はこれはもう嫌だ」と。「低くて大きいバスケットリングは嫌だ」と。「皆と同じように高いやつに向かって投げたい」という主張をしたときに、涙が出そうになるくらい嬉しかった。それぞれの子どものレベル全体的に見れば、バスケが（安田）翔飛君みたいに上手だったり、もっとレベルの低いアスリートもいるんですけど、1人1人が1年経つとすごく成長しているっていうのを見るとすごく嬉しくなるし、「やっててよかったな」という気になります。まだいっぱいあるんですけどね。

藤本：わかりました。最後、山ノ内さん。

山ノ内：はい。私はね、趣味が人間観察なものですから、本当みんな見てるとね、個性が半端ないんだよね。みんなそれぞれ。それを見てるだけでもね、なんかワクワクしてね。「なんでそんなこと言うの」とか「なんでそんなことするの」とか「なんでそんな表情するの」とかなんか面白くて、面白くて。言っちゃ悪いけど。本当楽しくてしょうがない。そういうところです。

安藤：じゃあ、そしたら私からいいですか？

藤本：フリーの質問でいいですか。いいですよ、どうぞ。

安藤：私の方から。皆さん、色々長く（SO活動を）やられてるってことだったんですが。ごめんなさい、また同じことを言おうとした。だめだ、今日調子が悪い。ごめんなさい。

安田：調子が悪いよ。どうしたの（笑）

山ノ内：こういうの見てるのが面白いんだよね。

藤本：大丈夫だよ。落ち着いて。大丈夫、大丈夫。

安田：里未さんがこんな調子珍しいですよ、皆さん（笑）

藤本：本当に珍しい！

安田：どうしたの今日。大丈夫？（笑）



アンバサダー：(笑)

安田：やっぱね、身近な人がおるから、みんな緊張するんだって。だって俺も秀さん今日いるからめっちゃ緊張しているんだから！

安藤：ですね、ですね。よく会っている方だから。

藤原：この前も叱られたしな。

安田：余計なことっすよ、秀さん、本当に(笑)。

藤原：会議の時に帽子被ったままで「帽子とれ」って怒られてね。

安藤：時々やってる。アンバサダーの時もやっております。

安田：あ～秀さん、余計なこと、余計なこと！それも余計なこと。言わなくていいから(笑)

安藤：はい、わかりました。は～、面白い。

安田：じゃあ、僕から質問良い？先。

安藤・藤本：いいですよ。どうぞ。

安田 — お好きな漫画とか、子供の頃ハマっていたアニメとかありますか？

盛田：アニメですか？子どものころ？子どもの頃でもないんだけど、私は野球漫画が大好きで。あと、お2人（藤原さん、山ノ内さん）ご存知かもしれないけど「ドカベン」だとか「野球狂の詩」だとか「プレイボール」だとか、そのあたりの漫画をダーっとよく読んで、全巻そろえて繰り返し読んだりなんかしていましたね。スポーツが元々好きでしたので、やるのも観るのも好きだったのでそういうのに夢中になっていました。

安田：じゃあ、次に山ノ内さん。お願いします。

山ノ内：そうですね。時代的にいうと「巨人の星」っていうの知っている？

安田：知ってます、知ってます。巨人の星、聞いたことがあります。

山ノ内：スポーツ根性もんだけどね。そういうの。あとは、最近はアニメというか、「トトロ」。

安田：あ～ジブリ。

山ノ内：そ！あの辺は大好きですね。

安田：ありがとうございます。じゃあ、うちの秀さんよろしくお願いします。

藤原：「鉄腕アトム」とかぐらいかな。さっき出てた「ドカベン」とか「星一徹」も観たし。最近っていっても随分前になるんだけど、僕「ゴルゴ13」が好きで。

安田：その話聞いたことあるような(笑)

藤原：あの文庫本があると必ず手に取ってみちゃいますね。すごい緻密なストーリー性があって好きです。



安田：ありがとうございます。

藤本：次、フリーなところで質問いきますけど。あ、安藤さんいいですか？

安藤：あ、どうぞどうぞ、先に、いいですよ。

藤本：3人に聞きますけど、音楽。よく聞いている曲はなんですか？まずは山ノ内さんから。

山ノ内：サザン！

安田：おー、サザンオールスターズ！

藤本：サザンのどういう曲ですか？

山ノ内：サザン、色々。本当色々！いっぱい曲あるじゃない。

藤本・安藤：ありますね。

山ノ内：その時のムードに合わせてさ。これでもロマンチストなんだからさ。

安藤：雰囲気的にそんな感じがしました。

山ノ内：ありがとうございます。神奈川、湘南だしね。

藤本：次、藤原さん。

藤原：はい。サザンも好きですけど、僕は、普段はあんまり、最近音楽聞かなくて。（音楽が）好きなんですけどね。学生時代にフォークソングをやっていたので、井上陽水とかね、なんかが割合好きです。

山ノ内：愛史知ってんの？（井上）陽水とか。

藤本：少年時代とか。

藤原：少年時代ね。そうね。そうそう。

藤本：たしか小学校の時にリコーダーで吹きまして。

藤原：僕は「サイモン&ガーファンクル」が好きで。

山ノ内：藤原さんとほぼ（世代）一緒ですよ。



藤原：そうですね。「明日に架ける橋」は何も見なくても歌えますけども。

安藤：えーすごい。

藤原：だけど本当最近、歌わないですね。まずカラオケ行かないし、(コロナで)行けないし。
本当、音楽から遠ざかっています。

藤本：わかりました。じゃあ、盛田さん。

盛田：出てきていましたけども、サザンも同年代なのでごくよく聞きますし。さだまさしさんの曲なんかもよく聞
くし。もちろん、中学校か高校くらいですかね「サイモン」とか「ガーファンクル」1番最初に聴いたの。

藤原：若いな(笑)

盛田：あ、年がわかるか。そのころに聴いたんですよ。受験勉強と称して深夜のラジオ番組ばかり聞いていた口なの
で、そのころの音楽は色々記憶にはあります。ここ10年くらい聞いているのはね、知らないだろうな。おば
ちゃんには人気だと思うんですけど「イル・ディーヴォ」っていう世界的なアーティスト、チーム4人組の男
性の(グループが)あるんですけども、それが好きで聞いてます。割りと朗々と歌うオペラ風というか、クラシ
ック風の歌は最近ちょっと好きだなと思っています。

安藤：イル・ディーヴォ、なんか聞いたことあるな。

盛田：お母さん知ってるかもよ、里末ちゃん。

安藤：そうかもしれないですね。もしかしたら。はい、わかりました。でも母はあんまり、そんなに音楽
聴かない人だから、もしかしたら知らないかもしれない。

安藤 ー皆さん好きなスポーツはありますか？

藤原：はい。好きなスポーツは学生時代バスケットやっていたので、まずバスケットが好きです。サッカー
も好きだし、色々好きですけど、野球だけ僕あんまり好きになれなくて。やるのはまだいいんだけど、
プロ野球にのぼせて観るっていうのはあんまり好きではありません。

安藤：ああ、なるほど。確かに私もなんか試合を観てたら疲れるのであんまり観ないっていうその気持ちはわかりま
す。

藤原：ただ、最近、(MLBの)大谷翔平君の活躍はすごいなって思っていますけどね。

安藤：そうですね。ありがとうございます。そしたら次、盛田さん。





盛田：昔からおてんばだったのでスポーツはどれも大好きでしたし、観るもの好きです。

最近はまだ観ることしかしないですけど。さっき言いましたように野球はね、漫画を読んでいたせいもあるし、自分自身がソフトボールとか好きだったので、部活はやっていなかったんですけどソフトボールはよくやっていた。

その影響かうちの息子のうち1人が少年野球をやっておりましてので、その応援に全力を注いでたというか、ストレス解消になっていました。子どもたちが頑張るのを見ているとこっちが（野球を）やった気分になってすごい充実してました。

安藤：それはわかります、なんか。自分もやるのは好きだけど、やっている人を見ると「ああ、私も頑張らないと」とか「頑張ってやっ페이こう」という気持ちになるからすごくわかります。

ありがとうございます。じゃあ最後に山ノ内さん、お願いします。

山ノ内：私もありとあらゆるスポーツが好きで、観るよりはやる方が好きなタイプです。それで一番やった中で好きなのは、あんまりやっている人少ないかと思えますけど、アイスホッケー。最後やっていたんですね。それがやっぱり自分がやった中では究極に体も動かすし、合理的だし、戦闘的だし、楽しかったですね。

安藤：へ～、アイスホッケーか。最近いろんなスペシャル（オリンピックス）の方でも、アイスホッケーもやってたり、やっ페이いく、なんかはあったりしますもんね。

山ノ内：フロアホッケーだね、今ね。

安藤：ああ、フロアの方か。アイスの方はそっか、あんまりか。失礼いたしました。ちょっと間違えてしまった。

藤本：最後おれがフリーでいいでしょうか？皆さんに質問なんですけど、応援ソングって何の曲を聴いたことがありますか？

山ノ内：応援ソング？

安藤：なんか、オリンピックとかそういうので「これはよく聞いてたな」とかいうことかな？

藤本：そうですね。オリンピックとかでなくても、好きな曲とか含めてもいいと思います。まず、指名は藤原さん。

藤原：2000年のアテネオリンピックのテーマ曲。あれ何だったっけ？

藤本：「栄光の架橋」

藤原：そうそう。あれをよく歌ってました。というのはさっき言いませんでしたけど、今でもやっていますが、私ボートを漕ぐんですよ。松江市民レガッタっていうのがあって、全国で市民レガッタとして一番大きい大会なんです。300クルーくらい出ますけどね。それでどの部門でも、優勝したら打ち上げの時に歌う歌なんです。なんでかって言うと2000年の男子の一部で、私たちの仲間が優勝して、その時からどこかのクルーが優勝し





たらそれを打ち上げの時にみんなで歌うということにしています。
最近、今年も東京オリンピックでも随分歌われていて、懐かしいなと思って聞きましたけどもね。

藤本：わかりました。次、盛田さん。

盛田：いざ応援ソングって聞かれるとどんなのがあったかなって思ったんですけど。一番真っ先に思い出したのが ZARD。夏の甲子園のときの ZARD の曲が確か入ったことがありましたよね。

安藤・藤本：ああ、ありましたね。

盛田：あれなんとなくたまにメロディーを（鼻歌で）口ずさんだりなんかすることがありますけど。

藤本：「負けしないで」って曲ですか？

盛田：そうそうそう、それです。

藤本：そっか。最後、山ノ内さん。

山ノ内：チャンチャンチャーン、チャチャチャチャーン、チャンチャンチャーン♪

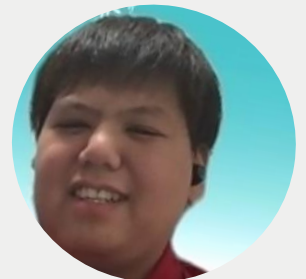
安藤：なんだったっけ？

山ノ内：チャンチャチャチャチャチャン！ハイ！チャンチャチャチャチャチャン！ハイ！これ。

一同：（笑）

安藤：私ものってしもうた（笑）

山ノ内：曲名はわかんない！よくね、甲子園でもね、かかっているしね。



安藤 SO 活動を長くやっていて良かったと思うことってありますか？

山ノ内：さっきも言ったんですけども私人間大好きなんで、いろんな立場の方っていうのかな。アスリートはもちろん、ボランティアの方、協賛して下さる会社の方、取材に来られる方だとか、学校の先生の方だとか、もちろんファミリーの方だとか、いろんな立場の方が、いろんな形でかかわってくださって、そういう方と話せるっていうのが、いろんな考え方だとかね、いろんな気持ちがわかって良いというか、長くやっていてよかったなとは思いますがね。

安藤：確かに。いろんな方と関わったら考えとかも変わったりとかしていくから良いですよ。
ありがとうございました。次、盛田さんお願いしてよろしいですか。



盛田：同じく本当にいろいろな方が関わってくださるので、

確かに人間観察の点からいうととっても面白いです。自分が思いもしなかったこと、考えもしなかったこと、そんな風なこと色々教えてもらえるのはとても「へえ〜」っていう感じで面白いと思います。

あとは長くやっていると、やっぱり1人1人のアスリートの成長。初めてスペシャルに関わるようになったころから今もう、例えば5年とか10年とか経つアスリート。「昔こんなことすごく嫌がっていたのに今ちゃんとできるんだ」とか、自分のことで一生懸命だった子がちゃんと人のお世話というか、他のアスリートに声をかけたり、手伝ったり、それから私たちの方に逆に気を遣って声をかけてくれたりっていうこともあるし。今何か問題抱えているのかなって思うような顔を見せるようなときもあるし。色々ですけど。そういうものが、幅も広く人と知り合えるし、1人の人を長く見ていられる。つまり縦も横も両方経験できるっていうのはなかなか他ではない機会だなんて思っています。

安藤：ですね、ですね。本当にいいですね。ありがとうございました。最後になりましたが、藤原さん。

藤原：お2人の話とおんなじようなことなんですけど、本当小さい、初めて出会ったときに小学生だった子がもう成人をしているんですね。一緒にお酒が飲めるという年代になったよな、翔飛もな。私子ども2人いるんですけど、自分の子ども以外にそういう小さい時からずっと付き合っ、ずっと見てきた子どもさんっていう、もう大人なんだけど。アスリートとですね、忌憚なくてというか、遠慮せずにお話ができるということが、すごくいいなと思うし、山ノ内さんや盛田さんに比べたら僕なんかは未だ活動歴が少ないんですけど、やっぱりそういうところが一番いいなと思います。1人1人の成長が見えてくるっていうね。それが一番いいとこかなという風に思います。

安藤 —これからのSOはどうなってほしいですか？
それと、アスリートにはどうなってほしいでしょうか？



盛田：これからのスペシャル（オリンピックス）は、やっぱり長く続いてほしいですね。

アスリートにもどんどん参加してもらいたいし、関わってくださるボランティアさんとかそれから支援してくださる方々とかがやっぱり長く関わってくださるように。

特別じゃなくて当たり前にある活動で、当たり前みんなが自分にできること、ちょっと力を貸してくれるっていうような普通の活動というかね。特別なんだけど普通の活動っていう風になってくれるといいなと思います。何時でもそこにある、どこにでも行けるっていう。そんなのがあればいいなと思います。

アスリートは本当にそのままいてくれたらいいかな。皆もそうでしょうけれども、悩んだり、ちょっと辛い思いをすることもあるかもしれないけども、でもやっぱりそれも、とても大事な、大事なというか、経験していくことできっとそこから1ステップ、2ステップ成長していけると思うので、アスリートのみんなにもスペシャルに関わる中で毎日の生活を楽しんでもらいたいし、充実させていてもらいたいなと思います。

安藤：はい、ありがとうございました。山ノ内さんお願いします。

山ノ内：今、盛田さんのおっしゃったことの究極の先、SOが必要なくなる世界になる。当たり前になってしまっ、



今おっしゃったようにわざわざ特別なことではなくて、みんな当たり前のことになればわざわざやんなくたっていいようになれば良いのかなと思います。

アスリートには自分ができることをやればいい。増やそうと思えば増やしてもいいし、兎に角やれることをやればいいと思います。以上です。

安藤：はい、ありがとうございました。じゃあ、最後になりますが、藤原さんお願いいたします。

藤原：お2人のお話の繰り返しになるんですけども、SOにどうなってほしい、楽しい活動の場であってほしいっていうのがまず思います。

それからアスリートにどうなってほしいのか。社会性を身につけてほしいなという風に思います。スペシャルオリンピックスの活動をして、続けていけば絶対大丈夫なんだけども、そういうところも含めて、楽しく。楽しいのが1番だと思いますけど、やってほしいなという風に思っています。以上です。

藤本 —最後に、アスリートアンバサダーに聞きたいことやアドバイスはありますか？

盛田：3人ともとても魅力的だと思います。今3人でやり取りしているのを見てると、とってものびのびしているし、そのままずっといてほしいなって思います。今3人がアンバサダーとして活動されているけれども、みんなを見て「自分もああいうことやってみたい」、「自分もこんな風になりたい」って思うアスリートがどんどん出てきてくれるといいなという風に思っています。そのための皆さんは目標になるように。(アスリートアンバサダーが)みんなが毎日生き生きと過ごしている姿をどうぞ見せてってください。

安藤：ありがとうございます。

藤本：次、藤原さん。

藤原：それぞれが頑張ってるんだけど、個人として1つ目標をもって活動していくといいのかなという風に思います。それとは別に一緒に活動している仲間、特に自分よりも年の若い人に指導して、指導っていうのかな、一緒に活動する中で教えてあげてほしいなという風に思います。

あなた方3人は下の(年齢の)人から見ると憧れだと思うので、日ごろの行動も含めて、模範となってやってほしいなと思います。以上です。

安藤・藤本：ありがとうございます。

藤本：最後、山ノ内さんから。



山ノ内：おそらく皆さん3人とも、このアンバサダーになってくれて言われた時は「ええ!？」ってびっくりしたんじゃないかと思うんです。いっぱい日本中にアスリートがいるけど、その中でこういうちょっと違った役割を担うってことはすごく経験になるだろうし、いろんなことでびっくりしたり、悩んだり、驚いたり、有名人に会えたり、戸惑ったりすると思うんですけど、もらったチャンス、それをすごく大事にしたいな。

ひょっとしたら「ええ、やだな」って思うことが起きてても、それをチャンスだと思って自分のものにしてもらえたらいいなという風に思っています。それと、きっとこのアンバサダーって最初1年とかの話だったんじゃないの？

安田：本当は8月までの予定でした。

山ノ内：でも、コロナの状況でやりたいところもできなかったんだろうから、僕からのお願いというか、もっと10年位続けないと。

一同：(笑)

安藤：やや、それはちょっと(笑)

山ノ内：もう少し続けてください。



藤本：これでインタビューを終わりにしたいと思います。インタビューをやってみて感想を一言。これからのアスリートアンバサダーは活動の目標(の発表)をお願いします。僕からいきます。

得意だったことは、バスケットボールの練習をしているのでランニングしたりしています。少しずつシュートもうまくなっていることです。苦手なことを言いますと、オンラインマラソンですけど、走った(距離)のをパソコンで計算するのが苦手なことです。あとビデオメッセージでテイク24回かかったので、苦手で大変です。

今後の目標です。1つ、バスケットボールをやっていてシュート、パス、ドリブル、リバウンドしっかりやる。2つ、100秒間チャレンジを完全制覇するようにすることです。最後、注目のSOのアスリートと呼ばれるように頑張りたいと思います。以上、この3つです。

一同：拍手

安藤：じゃあ、安田さん。

安田：今日はお3方、ありがとうございました。とても楽しい1時間でした。不慣れなところがあり申し訳ございませんでした。これからもアスリートアンバサダーのことを応援よろしくお願いします。

得意だったことは、こうやって人前で、秀さんはわかると思うんですけど、小学生のころ僕はもう本当に人前で話すのが苦手で、人前に出たら必ず泣く男だったので。お3方知っておられると思うんですけど、全国発表会の時に優勝させてもらって、それが自信につながりました。人前にこうやって話すのも得意になったので、そこは得意かなと思うんですけど。苦手なところは、秀さんはもうわかると思うんですけど、感情のコントロールが苦手なので、すぐカッとなったらモノに当たってしまうところがあるので、そこはしっかり直して行って、後輩たちにいい見本になるように頑張っていきたいなと思います。

今後の目標は、スペシャルオリンピックスが日本で当たり前、知っていて当たり前の世界を作っていこうと思っているので、応援よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

一同：拍手

藤本：最後、安藤さん。

安藤：お忙しい中、お3方インタビューの方にお越しいただきありがとうございました。本当に楽しいインタビューにもなりましたし、もっと皆さんの気持ちとか想いとかわかってきたので、そこは色々と参考、参考というか、それ（想い）を持ちながらやっていきたいなと思いました。

私の方の目標なんですけど、インタビューをやってきて話を引き出す、今日全然引き出すことができなかったからあれだったんですけど、それがちょっと得意っていうのがわかってきたので、そこをもっと磨いていきたいなという思いはあります。

それとみんなが言っていた得意分野とか不得意分野なんですけど、私は得意分野はさっき言ったとおり話を引き出すことが得意ってことが分かったので、それを磨いていきたいのと、不得意なところは安田さんと被るんですけど、感情のコントロールが時々、仕事中でもちょっとなったりするので、そこをもっとこのアスリートアンバサダーでも、アスリートでもやっていきたいなと思いますので、今年の12月でアンバサダーが終わるんですけども、これらかもよろしく願いいたします。以上です。

一同：拍手

藤本：地区の皆さんからも順番に今日の感想をお願いします。では、盛田さんからお願いします。

盛田：皆さん、お疲れ様でした。人の話を聞いたり、話を展開したりってとっても難しいことだと思う。だから、たぶん3人もきつと日ごろからそういう訓練とか、意識して準備をされてきたと思いますけれども、本当に今日は素敵なリードぶりだったなという風に思っています。他のアスリートたちがみんなね、皆さんと同じようにできるわけではないんですけど、たぶん皆さんが気持ちを言うてくださることが、たぶん他のアスリートたちの気持ちを代弁している部分が多いと思うので、私たちも色々と皆さんの意見だとか、考えだとか「日ごろこんな風に過ごしているよ」というようなことでもいいので、知る機会が増えればいいなという風に思っています。今日はどうもお疲れ様でした。

藤本：お疲れ様でした。

安藤：ありがとうございました。

安田：拍手

藤本：次、藤原さん。

藤原：はい、お疲れ様でした。長い時間ご苦労様でした。安田君は前から知っているんですけど、あとの2方初めてお会いして、すごいなと思って見ていました。これから私たち組織を運営する、それからプログラムを運営するっていう大人の役割もあるんですけど、アスリートと一緒に、さっきから何回も言っているように楽しく。1歩でも2歩でも前に進んでいく活動を続けていけたらなという風に思いますので、（アスリートアンバサダー）お3方の益々のご活躍をお祈りしております。一緒にまたやっていきましょう。ありがとうございました。

藤本・安藤：ありがとうございます。

安田：拍手

藤本：最後。山ノ内さんから。

山ノ内：今まで色々なね、フィギュアスケートの方とかバスケットの方とかインタビューされてきて、その様子も拝見してもらいましたが、今日が一番みんなアシなんじゃないの、地を出しているんじゃないの？飾らない姿を。

アンバサダー：いやいやいやいや（笑）

山ノ内：とても楽しく過ごさせて頂きました。本当、自然体でいるっていうことが、緊張もするだろうけど、自然体でいるっていうことがとても大事だと思うので、これからも自分の良いところ、悪いところ、自然な目で見ながら生活していただけたらと思います。先ほども言いましたが、あと 10 年（アンバサダー活動）頑張ってください。以上です。ありがとうございました。

アンバサダー：ありがとうございます。

安田：今日は本当にありがとうございました。これでインタビューを終わりたいと思います。
今日は本当にありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

